

# 山鴟

芥川龍之介

青空文庫



千八百八十年五月何日かの日暮れ方である。二年ぶりにヤスナヤ・ポリヤナを訪れた「van Turgenyefは主あるじのTolsioi伯爵と一しよに、ヴァロンカ川の向うの雑木林へ、山やま嶋しまを打ちに出かけて行つた。

嶋打ちの一行には、この二人の翁おきなの外にも、まだ若々しさの失せないトルストイ夫人や、犬をつれた子供たちが加はつてゐた。

ヴァロンカ川へ出るまでの路は、大抵麦畑の中を通つてゐた。日没と共に生じた微風は、その麦の葉を渡りながら、静に土の匂を運んで来た。トルストイは銃を肩にしなが、誰よりも先に歩いて行つた。さうして時々後を向いては、トルストイ夫人と歩いてゐるトルゲネフに話しかけた。その度に「父と子と」の作家は、やや驚いたやうに眼を挙げながら、嬉しさうに滑らかな返事をした。時によると又幅の広い肩を揺すつて、囁しほがれた笑ひ声を洩す事もあつた。それは無骨ぶごつなトルストイに比べると、上品な趣があると同時に、何処どこか女らしい答ぶりだつた。

路がだらだら坂になつた時、兄弟らしい村の子供が、向うから二人走つて来た。彼等はトルストイの顔を見ると、一度に足を止めて目礼をした。それから又元のやうに、はだし

の足の裏を見せながら、勢よく坂を駆け上つて行つた。トルストイの子供たちの中には、後から彼等へ何事か、大声に呼びかけるものもあつた。が、二人はそれも聞えないやうに見る見る麦畑の向うに隠れてしまつた。

「村の子供たちは面白いよ。」

トルストイは残ざんくんを顔に受けながら、トウルゲネフの方を振返つた。

「ああ云ふ連中の言葉を聞いてみると、我々には思ひもつかない、直ちよくせつ截せつな云ひまはしを教へられる事がある。」

トウルゲネフは微笑した。今の彼は昔の彼ではない。昔の彼はトルストイの言葉に、子供らしい感激を感じると、我知らず皮肉に出勝ちだつた。……

「この間もああ云ふ連中を教えてみると、——」

トルストイは話し続けた。

「いきなり一人、教室を飛び出さうとする子供があるのだね。そこで何処へ行くのだと尋きいて見たら、白チヨオク墨チヨオクを食ひ欠きに行くのですと云ふのだ。貰ひに行くと云はなければ、折つて来るとも云ふのではない。食ひ欠きに行くと云ふのだね。かう云ふ言葉が使へるのは、現に白チヨオク墨チヨオクを嚙かじつてゐる露ロシヤ西亞シヤの子供があるばかりだ。我々大人には到底出来ない

「成程、これは露西亞の子供に限りさうだ。その上僕などはそんな話を聞かされると、しみじみ露西亞へ歸つて来たと言ふ心持がする。」

トウルゲネフは今更のやうに、麦畑へ眼を漂はせた。

「さうだらう。仏蘭西フランスなどでは子供までが、巻煙草位は吸ひ兼ねない。」

「さう云へばあなたもこの頃は、さつぱり煙草を召し上らないやうでございますね。」

トルストイ夫人は夫の悪諷から、巧妙に客を救ひ出した。

「ええ、すっかり煙草はやめにしました。巴里パリに二人美人がゐましてね、その人たちは私が煙草臭いと、接吻させないと云ふものですから。」

今度はトルストイが苦笑した。

その内に一行はヴァロンカ川を渡つて、鴨打しぎうちの場所へ辿り着いた。其処そこは川から遠くない、雑木林まじりが疎まばらになつた、湿気しづめの多い草地だつた。

トルストイはトウルゲネフに、最も好い打ち場を譲つた。そして彼自身はその打ち場から、百五十歩ばかり遠のいた、草地の一隅に位置を定めた。それからトルストイ夫人はトウルゲネフの側に、子供たちは彼等のずっと後に、各々分れてゐる事になつた。

空はまだ赤らんでゐた。その空を絡つた木々の梢が、一面にぼんやり煙つてゐるのは、もう匂の高い若芽が、簇つてゐるのに違ひなかつた。トウルゲネフは銃を提げたなり、透かすやうに木々の間を眺めた。薄明い林の中からは、時々風とは云へぬ程の風が、気軽さうな嘖りを漂はせて来た。

「駒鳥や鶉が啼いて居ります。」

トルストイ夫人は首を傾けながら、独り語のやうにかう云つた。  
おもむろ  
徐に沈黙の半時間が過ぎた。

その間に空は水のやうになつた。同時に遠近の樺の幹が、それだけ白々と見えるやうになつた。駒鳥や鶉の声の代りに、今は唯五十雀が、稀に鳴き声を送つて来る、——トウルゲネフはもう一度、疎な木々の中を透かして見た。が、今度は林の奥も、あら方々暗みに沈んでゐた。

この時一発の銃声が、突然林間に響き渡つた。後に待つてゐた子供たちは、その反響がまだ消えない内に、犬と先を争ひながら、獲物を拾ひに駆けて行つた。

「御主人に先を越されました。」

トウルゲネフは微笑しながら、トルストイ夫人を振り返つた。

やがて二男のイリアが母の所へ、草の中を走つて来た。さうしてトルストイの射止めたのは、山嶋やましぎだと云ふ報告をした。

トウルゲネフは口を挟んだ。

「誰が見つけました？」

「ドオラ（犬の名）が見つけたのです。——見つけた時は、まだ生きてゐましたよ。」

イリアは又母の方を向くと、健康さうな頬を火照ほてらせながら、その山嶋が見つかった時の一部始終を話して聞かせた。

トウルゲネフの空想には、「獵人日記」の一章のやうな、小品の光景がちらりと浮んだ。イリアが帰つて行つた後は、又元の通り静かになつた。薄暗い林の奥からは、春らしい若芽の匂だの湿つた土の匂だのが、しつとりとあたりへ溢れて来た。その中に何か眠さうな鳥が、時たま遠くに啼く声が出た。

「あれは、——？」

「縞蒿雀しまあをじです。」

トウルゲネフはすぐに返事をした。

縞蒿雀は忽ち啼きやんだ。それぎり少しばらく時は夕影の木々に、ぱつたり囀さへづりが途絶えてし

まつた。空は、——微風さへ全然落ちた空は、その生気のない林の上に、だんだん蒼い色を沈めて来る、——と思ふと覺けりが一羽、寂しい声を飛ばせながら、頭の上を翔かけて通つた。再び一発の銃声が、林間の寂寞を破つたのは、それから一時間も後の事だつた。

「リヨフ・ニコラエキツチは鳴打ちでも、やはり私を負かしさうです。」

トウルゲネフは眼だけ笑ひながら、ちよいと肩そびやを聳かせた。

子供たちが皆駈けだした音、ドオラが時々吠え立てる声、——それがもう一度静まつた時には、既に冷かな星の光が、点々と空に散らばつてゐた。林も今は見廻す限り、ひつそりと夜を封じた儘、枝一つ動かす気色けしきもなかつた。二十分、三十分、——退屈な時が過ぎると共に、この暮れ尽した湿地の上には、何処か薄明い春の霧もやが、ぼんやり足もとへ這ひ寄り始めた。が、彼等のゐまはりへは、未いまだに一羽も鳴らしい鳥は、現れるけはひが見えなかつた。

「今日はどう致しましたかしら。」

トルストイ夫人の眩つぶやきには、気の毒さうな調子も交つてゐた。

「こんなことは滅多にないのでございますけれども、——」

「奥さん、御聞きなさい。夜鶯が啼いてゐます。」



トウルゲネフは殊更に、縁のない方面へ話題を移した。

暗い林の奥からは、実際もう夜鶯が、朗かな声を漂はせて来た。二人は少時しばらく默然もくねんと、別々の事を考へながら、ぢつとその声に聞き入つてゐた。……

すると急に、——トウルゲネフ自身の言葉を借りれば、「しかしこの『急に』がわかるものは、唯獵人ばかりである。」——急に向うの草の中から、紛れやうのない啼き声と共に、一羽の山鳴が舞上つた。山鳴は枝垂しだれた木々の間に、薄白い羽裏を閃ひらめかせながら、すぐに宵暗よひやみへ消えようとする、——トウルゲネフはその瞬間、銃を肩に当てるが早い、器用にぐいと引き金を引いた。

一抹の煙と短い火と、——銃声は静な林の奥へ、長い反響を轟かせた。

「中あたつたかね？」

トルストイはこちらへ歩み寄りながら、声高に彼へ問ひかけた。

「中あたつたとも。石のやうに落ちて来た。」

子供たちはもう犬と一しよに、トウルゲネフの周囲へ集まつてゐた。

「探して御出で。」

トルストイは彼等に云ひつけた。

子供たちはドオラを先に、其処此処と獲物を探し歩いた。が、いくら探しても、山ま嶋しぎの屍骸しがいは見つからなかつた。ドオラも遮しや二無にむに二駈にけ廻つては、時々草の中へ佇たたずんだ儘、不足さうに唸るばかりだつた。

しまひには、トルストイやトウルゲネフも、子供たちへ助力を与へに來た。しかし山嶋は何処へ行つたか、やはり羽根さへも見当らなかつた。

「ゐないやうだね。」

二十分の後トルストイは、暗い木々の間に佇みながら、トウルゲネフの方へ言葉をかけた。

「ゐない訳があるものか？ 石のやうに落ちるのを見たのだから、——」

トウルゲネフはかう云ひながらも、あたりの草むらを見廻してゐた。

「中あたつた事は中つても、羽根へ中つただけだつたかも知れない。それなら落ちてからも逃げられる筈だ。」

「いや、羽根へ中つただけではない。確に僕は仕止めたのだ。」

トルストイは当惑さうに、ちよいと太い眉をひそめた。

「では犬が見つけさうなものだ。ドオラは仕止めた鳥と云へば、きつと啣くはへて來るのだか

ら、——」

「しかし実際仕止めたのだから仕方がない。」

トウルゲネフは銃を抱へた儘、苛立いらだたしさうな手真似をした。

「仕止めたか、仕止めないか、その位な区別は子供にもわかる。僕はちやんと見てゐたのだ。」

トルストイは嘲笑あざわふやうに、じろりと相手の顔を眺めた。

「それでは犬はどうしたのだ？」

「犬などは僕の知つた事ではない。僕は唯見た通りを云ふのだ。何しろ石のやうに落ちて来たのだから、——」

トウルゲネフはトルストイの眼に、挑戦的な光を見ると、思はずかう金切声を出した。

「 [Il est tombe' comme pierre, je t'assure !] 」

「しかしドオラが見つけない筈はない。」

この時幸ひトルストイ夫人が、二人の翁おきなに笑顔を見せながら、さりげない仲裁を試みに来た。夫人は明朝もう一度、子供たちを探しによこすから、今夜はこの儘トルストイの屋敷へ、引き上げた方が好からうと云つた。トウルゲネフはすぐに賛成した。

「ではさう願ふ事にしませう。明日になればきつとわかります。」

「さうだね、明日になればきつとわかるだらう。」

トルストイはまだ不服さうに、意地の悪い反語を投げつけると、突然トウルゲネフへ背を見せながら、さつさと林の外へ歩き出した。……

トウルゲネフが寢室へ退いたのは、その夜の十一時前後だった。彼はやつと独りになると、どつかり椅子へ坐つた儘、茫然とあたりを眺め廻した。

寢室は平生ふだんトルストイが、書齋きに定めてある一室だった。大きな書架、龕がんの中の半身像、三四枚の肖像の額、壁にとりつけた牡鹿の頭、——彼の周囲にはそれらの物が、蠟燭ろうそくの光に照らされながら、少しも派手な色彩のない、冷かな空気をつくつてゐた。が、それにも関らず、単に独りになつたと云ふ事が、兎に角今夜のトウルゲネフには、不思議な程嬉しい気がするのだつた。

——彼が寢室へ退く前、主客は一家の男女と共に、茶の卓テエブル子を囲みながら、雑談に夜を更ふかしてゐた。トウルゲネフは出来得る限り、快活に笑つたり話したりした。しかしトルストイはその間でも、不相あひかはらず変浮かない顔をしたなり、滅多に口も開かなかつた。それが始終トウルゲネフには、面つらく憎くもあれば無気味でもあつた。だから彼は一家の男女に、

ふだんよりも愛嬌を振り撒いては、わざと主人の沈黙を無視するやうに振舞はうとした。

一家の男女はトウルゲネフが、軽妙な諧謔を弄する度に、何れも愉快さうな笑ひ声を立てた。殊に彼が子供たちに、ハムブルグの動物園の象の声だの、巴里のガルソンの身ぶりだのを巧みに真似て見せる時は、一層その笑ひ声が高くなつた。が、一座が陽気になればなる程、トウルゲネフ自身の心もちは、愈妙にぎこちない息苦しさを感ずるばかりだつた。「君はこの頃有望な新進作家が出たのを知つてゐるか？」

話題が仏蘭西の文芸に移つた時、とうとう不自然な社交家ぶりに、堪へられなくなつたトウルゲネフは、突然トルストイを顧みながら、わざと気軽さうに声をかけた。

「知らない。何と云ふ作家だ？」

「ド・モウパスサン。——ギイ・ド・モオパスサンと云ふ作家だがね。少くとも外に真似手のない、犀利な観察眼を具へた作家だ。——丁度今僕の鞆の中には、La Maison Tellierと云ふ小説集がはひつてゐる。暇があつたら読んで見給へ。」

「ド・モオパスサン？」

トルストイは疑はしさうに、ちよいと相手の顔を眺めた。が、それぎり小説の事は、読むとも読まないとも答へずにしまつた。トウルゲネフは幼い時分、意地の悪い年上の子供

にいぢめられた覚えがある、——丁度そんな情<sup>なさけな</sup>無さが、この時も胸へこみ上げて来た。

「新進作家と云へばこちらへも、珍しい方が一人御見えになりましたよ。」

彼の当惑を察したトルストイ夫人は、早速風変りな訪問客の話をし始めた。——一月ばかり前の或暮れ方、余り身なりの好くない青年が、是非主人に会ひたいと云ふから、兎に角奥へ通して見ると、初対面の主人に向つて、「取りあへずあなたに頂きたいのは、火<sup>ウオツ</sup>酒と鯡<sup>にしん</sup>の尻尾<sup>しっぽ</sup>です。」と云ふ。そればかりでも既に驚かされたが、この又異様な青年が、既に多少は名声のある、新しい作家の一人だつたのには、愈<sup>いよいよ</sup>驚かすにはゐられなかつた。

……

「それがガルシンと云ふ方でした。」

トウルゲネフはこの名を聞くと、もう一度雑談の圈内へ、トルストイを誘つて見る氣になつた。と云ふのは相手の打ち融けないのが、益<sup>ますます</sup>不快になつた外にも、嘗<sup>かつ</sup>て彼はトルストイに、始めてガルシンの作物を紹介した縁故があるからだつた。

「ガルシンでしたか?——あの男の小説も悪くはあるまい。君はその後、何を読んだか知らないが、——」

「悪くはないやうだ。」

それでもトルストイは冷然と、好い加減な返事をしただけだった。――

トウルゲネフはやつと身を起すと、白髪しらがの頭を振りながら、静に書斎の中を歩き出した。小さな卓テエの上の蠟燭の火は、彼が行つたり来たりする度に、壁へ映つた彼の影を大小さまざまに変化させた。が、彼は黙然と、両手を後に組んだ儘、懶ものうさうな眼は何時までも、裸の床を離れなかつた。

トウルゲネフの心の中には、彼がトルストイと親しくしてゐた、二十余年以前の追憶が、一つ一つ鮮あざやかに浮んで来た。放蕩に放蕩を重ねては、ペテルブルグの彼の家へ、屢しばしば眠りに歸つて来た、将校時代のトルストイ、――ネクラゾフの客間の一つに、傲然と彼を眺めながら、チオルヂユ・サンドの攻撃に一切を忘れてゐたトルストイ、――スパスコイエの林間に、彼と散歩の足を止めては、夏の雲の美しさに感歎の声を洩らしてゐた、「三人の輕騎兵」時代のトルストイ、――それから最後にはフエツトの家で、二人とも拳こぶしを握つた儘、一生の悪罵を相手の顔へ投げつけた時のトルストイ、――それらの追憶のどれを見ても、我執の強いトルストイは、徹頭徹尾他人の中に、真実を認めない人間だった。常に他人のする事には、虚偽を感じずる人間だった。これは他人のする事が、何も彼のする事と矛盾してゐる時のみではない。たとひ彼と同じやうに、放蕩をしてゐたものがあつても、彼は彼

自身を恕すやうに他人を恕す事が出来なかつた。彼には他人が彼のやうに、夏の雲の美しさを感じてゐると云ふ事すら、すぐに信用は出来ないのである。彼がサンドを憎んだのも、やはり彼女の真実に疑を抱いたからだつた。一時彼がトウルゲネフと、絶交するやうになつたのも、——いや、現に彼はトウルゲネフが、山嶋を射落したと云ふ事にも、不相変あひかはらず嘘を嗅かぎつけてゐる。……

トウルゲネフは大きな息をしながら、ふと龕がんの前に足を止めた。龕の中には大理石の像が、遠い蠟燭の光を受けた、覚おぼつか束ない影に浮き出してゐる、——それはリヨフには長兄に当る、ニコライ・トルストイの半身像だつた。思へば彼とも親しかつた、この情愛の厚いニコライが、故人の数にはひつて以来、二十年あまりの日月は、何時の間にか過ぎてしまつた。もしニコライの半分でも、リヨフに他人の感情を思ひやる事が出来たなら、——トウルゲネフは長い間、春の夜の更けるのも知らないやうに、この仄ほのぐら暗い龕の中の像へ、寂しさうな眼を注いでゐた。……

翌朝トウルゲネフはやや早めに、特にこの家では食堂に定められた、二階ザラの客間へ出かけて行つた。客間ザラの壁には先祖の肖像画が、何枚も壁に並んでゐる、——その肖像画の一



つの下に、トルストイは卓<sup>テエフル</sup>へ向ひながら、郵便物に眼を通してゐた。が、彼の外にはまだ子供たちも、誰一人姿は見せなかつた。

二人の翁<sup>おきな</sup>は挨拶をした。

その間もトウルゲネフは、相手の顔色を窺<sup>うかが</sup>ひながら、少しでも其処に好意が見えれば、すぐに和睦<sup>わぼく</sup>する心算<sup>つもり</sup>だつた。がトルストイはまだ氣むづかしさうに、二言三言話した後は、又前のやうに黙々と、郵便物の調べにとりかかつた。トウルゲネフはやむを得ず、手近の椅子を一つ引き寄せると、これもやはり無言の儘<sup>まま</sup>、卓<sup>テエフル</sup>の上の新聞を読み始めた。

陰気な客間<sup>ザラ</sup>は少<sup>しばらく</sup>時の間、湯沸<sup>サモワル</sup>のたぎる音の外には、何の物音も聞えなかつた。

「昨夜<sup>ゆうべ</sup>はよく眠られたかね？」

郵便物に眼を通してしまふと、トルストイは何と思つたか、かうトウルゲネフへ声をかけた。

「よく眠られた。」

トウルゲネフは新聞を下した。さうしてもう一度トルストイが、話しかける時を待つてゐた。が、主人は銀の手のついたコップへ、湯沸<sup>サモワル</sup>の茶を落しながら、それぎり何とも口を利かなかつた。

かう云ふ事が一二度続いた後、トウルゲネフは丁度昨夜のやうに、不機嫌なトルストイの顔を見てゐるのが、だんだん苦しくなり始めた。殊に今朝は余人がゐないだけ、一層彼には心のやり場が、何処にもないやうな気がするのだつた。せめてトルストイ夫人でもゐてくれたら、——彼は苛立たしい肚の中に、何度となくかう思つた。が、この客間へはどうしたものか、未だに人はひつて来るけはひさへも見えなかつた。

五分、十分、——トウルゲネフはどうとうたまり兼ねたやうに、新聞を其処へ抛り出すと、蹠と椅子から立ち上つた。

その時客間の戸の外には、突然大勢の話し声や靴の音が聞え出した。それが皆先を争ふやうに、どやどや階段を駆け上つて来る——と思ふと次の瞬間には、乱暴に戸が開かれるが早いか、五六人の男女の子供たちが、口々に何かしやべりながら、一度に部屋の中へ飛びこんで来た。

「お父様、ありましたよ。」

先に立つたイリヤは得意さうに、手に下げた物を振つて見せた。

「私が始見つけたのよ。」

母によく似たタテイアナも、弟に負けない声を挙げた。

「落ちる時にひつかかつたのでせう。白楊はくやうの枝にぶら下つてゐました。」

最後にかう説明したのは、一番年嵩としかさのセルゲイだった。

トルストイは呆氣あつけにとられたやうに、子供たちの顔を見廻してゐた。が、昨日の山嶋が無事に見つかつた事を知ると、忽ち彼の髯ひげぶか深い顔には、晴れ晴れした微笑が浮んで来た。

「さうか？ 木の枝にひつかかつてゐたのか？ それでは犬にも見つからなかつた筈だ。」  
彼は椅子を離れながら、子供たちにまじつたトウルゲネフの前へ、遅たくましい右手をさし出した。

「イヴァン・セルゲエキツチ。これで僕も安心が出来る。僕は嘘をつくやうな人間ではない。この鳥も下に落ちてゐれば、きつとドオラが拾つて来たのだ。」

トウルゲネフは殆恥ほとんどしさうに、しつかりトルストイの手を握つた。見つかつたのは山嶋か、それとも「アンナ・カレニナ」の作家か、——「父と子」の作家の胸には、その判断にも迷ふ位、泣きたいやうな喜ばしさが、何時か一ぱいになつてゐたのだつた。

「僕だつて嘘をつくやうな人間ではない。見給へ。あの通りちやんと仕止めてあるではないか？ 何しろ銃が鳴ると同時に、石のやうに落ちて来たのだから、——」

二人の翁は顔を見合せると、云ひ合せたやうに哄笑した。

(大正九年十二月)

# 青空文庫情報

底本：「現代日本文學大系 ㊦ 芥川龍之介集」筑摩書房

1968（昭和43）年8月25日初版第1刷発行

初出：「中央公論」

1921（大正10）年1月

※「モウパスサン」と「モオパスサン」の混在は、底本通りです。

入力：:j:utyama

校正：かとうかおり

1999年1月19日公開

2014年5月30日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 山 嶋

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>